

各 関 係 機 関 御 中

石川県農林総合研究センター所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

令和7年度病虫害発生予報第2号を下記のとおり送付します。

連絡先	石川県農林総合研究センター 農業試験場 中央普及支援センター 病虫害防除室 電話 076-257-6972 (直通) FAX 076-257-9140 E-mail kisk0301@pref.ishikawa.lg.jp
-----	--

病虫害発生予報第2号

(予報期間：5月下旬～6月中旬)

予 報 内 容

水 稻

葉いもちの発生は**やや多**と予想される。本田に放置された補植苗は伝染源となるので、直ちに除去する。箱施薬していない場合は6月中旬に予防粒剤を散布する。発生を認めた場合は初期の防除を徹底する。

イネミズゾウムシの発生は**多**と予想される。箱施薬していないほ場では田植え後のほ場巡回に努め、1株当たりの成虫数が0.3頭以上認められたら直ちに防除する。

大 豆

茎疫病の発生は**やや多**と予想される。発芽直後の過湿条件は発生を助長するので、排水対策を徹底する。

ネキリムシ類の発生は**やや多**と予想される。は種時の防除を徹底する。

果 樹

ナシ黒星病の発生は**やや多**と予想される。降雨前の薬剤防除を徹底する。

ナシ黒斑病及び**リンゴ斑点落葉病**の発生は**やや多**と予想される。薬剤耐性菌の出現を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

カキ炭疽病の発生は**やや多**と予想される。感染しやすい徒長枝および不定芽を除去する。降雨前後の薬剤防除を徹底する。

アブラムシ類の発生は**多**と予想される。抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤

を連用しない。

ハマキムシ類の発生は**多**と予想される。発生初期の防除を徹底する。

カメムシ類の発生は**多**と予想される。発生を認めた場合は直ちに防除する。

アザミウマ類の発生は**やや多**と予想される。発生初期の防除を徹底する。

シンクイムシ類の発生は**やや多**と予想される。被害を受けた新梢を直ちに摘除し、土中深くに埋設する。

野菜・花き

スイカつる枯病及び**スイカ炭疽病**の発生は**やや多**と予想される。ほ場排水に努めるとともに、トンネル除去時及び発病初期の防除を徹底する。

スイカ褐斑細菌病の発生は**やや多**と予想される。ほ場排水に努めるとともに、発病初期の防除を徹底する。

オオタバコガの発生は**多**と予想される。発生初期の防除を徹底する。

コナガ、**アブラムシ類**及び**コナジラミ類**の発生は**多**と予想される。抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

アザミウマ類及び**ハモグリバエ類**の発生は**やや多**と予想される。抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

ネキリムシ類の発生は**やや多**と予想される。は種時の防除を徹底する。

※ 防除の実施に当たっては、最新の農薬使用基準を確認し、遵守する。 また、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。
--

気 象 予 報

1 か月予報 （令和 7 年 5 月 8 日発表 新潟地方気象台）

予報期間 5 月 1 0 日～6 月 9 日

[確率予報]

気 温	低い	1 0 %、	平年並	2 0 %、	高い	7 0 %
降 水 量	少ない	2 0 %、	平年並	4 0 %、	多い	4 0 %
日照時間	少ない	4 0 %、	平年並	4 0 %、	多い	2 0 %

[概要]

暖かい空気に覆われやすいため、向こう 1 か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。

湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう一か月の降水量は平年並が多いでしょう。日照時間は平年並か少ないでしょう。

・ 5 月 1 0 日 (土) ～ 5 月 1 6 日 (金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

・ 5 月 1 7 日 (土) ～ 5 月 2 3 日 (金)

天気は数日の周期で変わりますが、湿った空気の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

・ 5 月 2 4 日 (土) ～ 6 月 6 日 (金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

注 1) 発生量は平年比。
2) (+) は病害虫の発生に好適な要因、(－) は不適要因、
(±) は好適・不適に関与しない要因を示す

1 水稻の病害虫

葉いもち

発生時期	本田初発期は6月6半旬
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 気温は高い (+) (2) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) 本田に放置された補植苗は伝染源となるので、直ちに除去する。 (2) 箱施薬していない場合は6月中旬に予防粒剤を散布する。 (3) 発生を認めた場合は初期の防除を徹底する。

イネミズゾウムシ

発生時期	本田侵入盛期は5月2半旬以降
発生量	多
予報の根拠	(1) 前年の発生は多 (+) (2) 気温は高い (+)
防除上の注意事項	(1) 箱施薬していないほ場では田植え後のほ場巡回に努め、1株当たりの成虫数が0.3頭以上認められたら直ちに防除する。

イネドロオイムシ

発生時期	幼虫発生盛期は6月中旬
発生量	少
予報の根拠	(1) 現在の発生は少 (－) (2) 気温は高い (－) (3) 降水量は多い (－)
防除上の注意事項	(1) 箱施薬していないほ場では6月上旬に1株当たり1卵塊以上認められる場合に、直ちに防除する。

斑点米カメムシ類

発生時期	幼虫発生盛期は6月下旬
発生量	雑草地での発生は並
予報の根拠	(1) 雑草地での発生は少 (－) (2) 気温は高い (+)
防除上の注意事項	(1) 生息場所となる農道、畦畔、休耕田及び遊休地等の除草を徹底する。

2 大豆の病害虫

茎疫病

発生時期	6月上旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 降水量は平年並か多い(+)
防除上の注意事項	(1) 発芽直後の過湿条件は発生を助長するので、排水対策を徹底する。

ネキリムシ類（カブラヤガ・タマナヤガ）

発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) フェロモントラップ誘殺数は並(±) (2) 気温は高い(+)
防除上の注意事項	(1) は種時の防除を徹底する。

3 果樹の病害虫

ナシ黒星病

発生時期	5月中旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや多(+) (2) 気温は高い(-) (3) 降水量は平年並か多い(+)
防除上の注意事項	(1) 降雨前後の薬剤防除を徹底する。

ナシ黒斑病

発生時期	急増期は6月下旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや少(-) (2) 気温は高い(+) (3) 降水量は平年並か多い(+)
防除上の注意事項	(1) ポリオキシシンおよびジカルボキシイミド剤は耐性菌が県内に広く分布しているため、散布回数はそれぞれ年1回にとどめる。

リンゴ斑点落葉病

発生時期	急増期は6月下旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや少(-) (2) 気温は高い(+) (3) 降水量は平年並か多い(+)
防除上の注意事項	(1) 耐性菌の出現を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

ブドウ灰色かび病

発生時期	連続発生
発生量	並
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) 気温は高い（－） (3) 降水量は平年並か多い（＋）
防除上の注意事項	(1) 耐性菌の出現を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。 (2) 施設では換気に努め、過湿をさける。

ブドウべと病

発生時期	急増期は6月下旬以降
発生量	やや少
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや少（－） (2) 気温は高い（－） (3) 降水量は平年並か多い（＋）
防除上の注意事項	(1) 大粒種（ヨーロッパ系統）の発病に注意し、発生初期の防除を徹底する。

カキ炭疽病

発生時期	急増期は6月中旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) 去年の発生は多（＋） (3) 降水量は平年並か多い（＋）
防除上の注意事項	(1) 感染しやすい徒長枝および不定芽を除去する。 (2) 降雨前後の薬剤防除を徹底する。

カキ灰色かび病

発生時期	連続発生
発生量	やや少
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや少（－） (2) 気温は高い（－） (3) 降水量は平年並か多い（＋）
防除上の注意事項	(1) 耐性菌の出現を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

アブラムシ類

発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) 現在の発生は多（＋） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

ハダニ類

発生時期	6月中旬以降
発生量	並
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) 気温は高い（＋） (3) 降水量は平年並または多（－）
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。 (2) 発生源となる下草を刈り取った後、防除する。

アザミウマ類

発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 発生初期の防除を徹底する。

ハマキムシ類

発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数は多（＋） (3) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 発生初期の防除を徹底する。

カメムシ類（おもにツヤアオカメムシ）

発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) 昨年秋の発生は多（＋） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 発生を認めた場合は直ちに防除する。

シンクイムシ類

発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 発生初期の防除を徹底する。 (2) 被害を受けた新梢は直ちに摘除し、土中深くに埋設する。

4 野菜・花きの病害虫

灰色かび病

発生時期	連続発生
発生量	やや少
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや少 (－) (2) 気温は高い (－) (3) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) 施設内の換気に努め、過湿をさける。 (2) 耐性菌の出現を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

トマト葉かび病

発生時期	連続発生
発生量	やや少
予報の根拠	(1) 現在の発生はやや少 (－) (2) 気温は高い (－) (3) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) 施設内の換気に努め、過湿をさける。

スイカつる枯病

発生時期	急増期は6月6半旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 気温は高い (+) (2) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) トンネル除去時、および発病初期の防除を徹底する。 (2) ほ場排水に努める。

スイカ炭疽病

発生時期	急増期は6月下旬以降
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 気温は高い (+) (2) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) トンネル除去時、および発病初期の防除を徹底する。 (2) ほ場排水に努める。

スイカ褐斑細菌病

発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生は少 (－) (2) 気温は高い (+) (3) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) 大雨は本病の感染を助長するので、ほ場排水に努める。 (2) 発病初期の防除を徹底する。

ネギさび病	
発生時期	連続発生
発生量	やや少
予報の根拠	(1) 現在の発生は少 (－) (2) 気温は高い (－) (3) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) 被害枯死葉は、直ちにほ場外へ搬出する。
タマネギ、ネギべと病	
発生時期	連続発生
発生量	やや少
予報の根拠	(1) 現在の発生は少 (－) (2) 気温は高い (－) (3) 降水量は平年並か多い (+)
防除上の注意事項	(1) 発病初期の防除を徹底する。
アブラムシ類	
発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) 現在の発生は多 (+) (2) 気温は高い (+)
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
コナジラミ類	
発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) 現在の発生は多 (+) (2) 気温は高い (+)
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
アザミウマ類	
発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生は並 (±) (2) 気温は高い (+)
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
ハダニ類	
発生時期	連続発生
発生量	並
予報の根拠	(1) 現在の発生は並 (±) (2) 気温は高い (+) (3) 降水量は平年並みまたは多 (－)
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

ハモグリバエ類

発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) 現在の発生は並（±） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。

ネキリムシ類（カブラヤガ・タマナヤガ）

発生時期	連続発生
発生量	やや多
予報の根拠	(1) フェロモントラップ誘殺数は並（±） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) は種時の防除を徹底する。

オオタバコガ

発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) フェロモントラップ誘殺数は多（＋） (2) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 施設栽培では、開口部に寒冷紗等を設置して成虫の侵入を防止する。 (2) 発生初期の防除を徹底する。

コナガ（アブラナ科）

発生時期	連続発生
発生量	多
予報の根拠	(1) 現在の発生は多（＋） (2) フェロモントラップ誘殺数は少（－） (3) 予察灯の誘殺数は多（＋） (4) 気温は高い（＋）
防除上の注意事項	(1) 抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。 【病害虫発生予察注意報第1号（令和7年5月8日）参照】